

私と音楽

盛田 常夫

大学教員になりたての頃に、ゼミの学生を連れてスキー合宿に行った時のこと。食事が済んでカラオケタイムになり、フランク永井の「有楽町で逢いましょう」という定番の歌謡曲を歌った。ところが、学生たちはきょとんとしている。無理もない、この曲は学生たちが生まれる前にヒットしたものだ。彼らが歌うものは皆躍動感があって、テンポが速かった。歳之差を感じて白けたのを覚えている。

1988年に二度目のハンガリー長期滞在が決まり、すぐにブダペストのアパートにピアノを借りた。件のカラオケに懲りて音楽ジャンルを変え、日本から持参したのは小椋佳、来生たかお、井上陽水、五輪真弓などのニューミュージック系の楽譜。一人住まいだったので、毎夕、弾き語りで遊んでいたが、このハンガリー滞在中にさらに音楽のジャンル趣向が変わった。

1970年代の終わりにハンガリーに留学して初めてオペラ芸術なるものを知ったのだが、88年の赴任では足繁くオペラハウスに通った。とくに、モーツアルト「ドンジョヴァンニ」とプッチーニ「ボエーム」の二つのオペラには繰り返し通い続けただけでなく、出張の度にベルリン、ミュンヘン、プラハなどのオペラハウスでも鑑賞した。このオペラ熱の病が高じて、昼休みごとにペトユーフィ・シャンドル通りの楽譜屋（ロージャヴュルジ）に通い、オペラのピアノ譜を買い漁りだした。ドイツの Peters Edition 社のオペラピアノ譜を安く買えるので、新しいピアノ譜を見つけては買い求めた。余談になるが、旧体制時代の中・東欧諸国では西側よりかなり安く楽譜が買えた。西ベルリンに住んでいる多くの音楽留学生は、西で安価に購入した東独マルクを隠し持って、東ベルリンで楽譜を買い、たっぷり食事して西に戻るのを日課にしていた。

「ボエーム」はプロの音楽家にも人気がある。マエストロ小林はルドルフの aria を弾き語りするし、やはり指揮者でハンガリーの故ルカーチ・エルヴィンは暗譜で「ボエーム」を振っていた。ピアニストの加藤洋之君も、我が家でいきなりムゼッタの aria を弾き出し、「これが好きなんだよね」と語っていた。このオペラはプッチーニの最高傑作で、それに比べて他のオペラは無駄があり退屈する。「ボエーム」は起承転結が明瞭で、aria やデュエットが散りばめられている。無駄や遊びがなく、しかもモチーフの旋律が一貫して流れている。時間的にも短い。そこが音楽家にも好まれるところだろうか。

オペラの aria を歌うのは難しい。音程をしっかりと捉えるためにピアノでの練習は不可欠である。歌詞の内容を理解しないと、美しく表現できない。さらに、ピアノ伴奏なら何とか歌えても、オーケストラをバックに歌うのはまったく別物。オーケストラは単純な旋律ではなく、複合的な音を作り出すから、歌手はその中に自分で音を美しく置いていかなければならないからだ。

私はピアノや歌唱の教育を受けていない。自己流だから、絶対的な限界がある。急に思

い立って中学生の時に2年ほどピアノを習ったが、家にはオルガンしかなく、歯がゆい思いをした。しかも、団塊世代の受験競争で、すぐにピアノから遠ざかってしまった。それから数十年の時間を経て、1990年代初めに「炎の指揮者コバケン」こと小林研一郎さんと出会って、音楽の世界が広がった。「門前の小僧習わぬ経を読む」で、マエストロのリハーサルを見たり、ホームコンサートに来ていただいたりして、発声や歌い方などを教わった。ピアノは駄目でも、歌と一緒に弾き語りなら、なんとか形になるのではないかと、無謀にもオペラのピアノ譜で弾き語りに挑戦しだした。

幸い、私の周りにはたくさんの音楽家の友人がいる。もっとも古い仲間が坂井圭子さんで、ハンガリー野村証券で最初に採用面接して以来、何かの催し物がある度に共演をお願いしている。ムッゼタのアリアはホームコンサートの定番で、私が弾ける数少ないアリアの一つ。ジョヴァンニとツェルリーナの **Duettino** は小さな集まりで披露するかくし芸。最近、国立フィルのバルタ・ジョルトとモルナール・ジュジャンナ夫妻のチェロとバイオリンをバックにして、歌曲や日本のポップスを歌うのが楽しみになっている。

昨秋来、日本へ出張する度に、機内で最新のポップスを聴いている。順々に最初の出だしの20秒程度を聴く。子供のグループがワイワイ騒いでいるような雑音は出だしの数秒で駄目を押す。長く歌い続けられる、しっとりとした聴かせるような旋律に出会うと、最後まで聴く。これまでの収穫は「コブクロ」。彼らが自分の味付けで古いヒット曲を歌っているのが気に入った。そこから、尾崎豊「I love you」と槇原敬之「Answer」を選び、インターネットで楽譜を購入した。今年のクリスマスはチェロ、バイオリン、ピアノをバックに Answer を歌った。ただ、これはもう20年ほど前のヒット曲で新曲ではない。もっと新しいものがないかと探していたら一つ収穫があった。「指輪」(Nagy & Ivory) のCDを購入したところ、「最愛」という曲が付属していた。「指輪」は結婚式などで結構使われているヒット曲だが、この「最愛」はほとんど知られていないいわゆるB面曲。ところが、「指輪」より詩も旋律も良く気に入った。これもインターネットでピアノ譜を購入した。今冬のクリスマスパーティにはこの曲の弾き語りか披露できそうだ。

最近、バルタ・ジョルト夫妻からもらったセシリア・バルトリのCDがすごく良い。最初の曲がヘンデルのオペラ「リナルド」のアリア「私を泣かせてください」。彼女の歌には感情がいっぱい込められている。YouTubeを見ると、同じ曲をニュージーランドの若い歌手ヘイリー・ウェステンラが歌っている。日本でも知られている歌手だが、彼女の「私を泣かせてください」はいただけない。歌詞の内容を知らないのか、明るく一本調子に歌っている。マエストロ小林がこれを聴いたなら、「君は下手だね。歌詞を勉強したの？ 家に帰って、もう一度歌詞を勉強してからいらっしゃい」と、リハーサルから下ろされるだろう。7月のホームコンサートでは、ホストの特権で、バルタ夫妻に井上奈央子さんをバックにこの曲を歌わせてもらった。もちろん、バルトリが歌うように、心をこめて。